

大阪・関西万博、「あんぱん」で気付く利他の精神

2025年日本国際博覧会（通称：大阪・関西万博）は184日間の開催を経て、10月13日に閉幕した。今から4年前、57年ぶりに東京で開催されたオリンピックは、コロナ禍の最中で、ほぼ無観客での競技を余儀なくされたこともあり、不完全燃焼の感が拭えなかった。こうしたなか、55年ぶりに大阪に戻ってきた万博は、当初はしらけムードもあったものの、公式キャラクターであるミャクミャクの人気とともに盛り上がっていった。9月上旬には入場券の販売枚数が2,000万枚を超えるなど、運営収支は黒字を達成した模様だ。

筆者も7月に大阪・関西万博を2日間にわたって訪問した。1時間並んで入場したヨルダン館では同国南部の砂漠地帯ワディラムから搬入した赤い砂の上に裸足で腰掛けた。外が炎天下だったこともあり、ひんやりとして心地よかった。また、チェコ館レストランではピルスナー（チェコ発祥のビール）、モナコ館ワインバーではワインを味わった。夜の大屋根リングから見たドローンショーもまた素晴らしかった。大人ならではの楽しみ方をできたと思う。

これまで筆者はポートピア'81やつくば万博に行った経験がある。どちらも40年近く昔のことで、記憶は既におぼろげだが、「万博に行ったこと」はいい体験だったと感じる。万博を日本に誘致することへの反対意見もそれなりにあったが、次世代を担う若年層が行って体験することには十分意味があるだろう。海外パビリオンで価値観の違いを感じたり、最先端の科学技術に触れてみたりできるのは万博ならではの非日常的な体験だ。

大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」であったが、会場中心部には「いのちの輝きプロジェクト」と題し、各界で活躍する8人のプロデューサーがテーマごとにそれぞれ展開するシグネチャーパビリオンが配置された。筆者は、事前抽選で当選した「いのち動平衡館」（生物学者の福岡伸一氏のプロデュース）に入場したが、「生命の進化は利他的な行動でもたらされている」というメッセージは心に刺さった。ちょうど25年度前期の朝ドラ「あんぱん」は、漫画家やなせたかしと小松暢の夫婦をモデルに、いかにして異色のヒーロー「アンパンマン」が生まれたかを描いたドラマだったことに気づいた。筆者も幼稚園にあった絵本「あんぱんまん」で初期のアンパンマンと出会った。ひもじい旅人らにあんぱんでできた頭を差し出し、首無し状態で戻るとパン工場のおじさんが新しい頭を付けてくれるという内容は、実にシュールだった。当時の大人たちには決して受けが良くなかったようだ。しかし、その後、憎めない敵キャラ「ばいきんまん」らが投入され、アンパンマンの世界は陰陽互根のような深みが増した。今や子どもたちに大人気だ。

見返りを求めず、自分が傷ついても人助けをするアンパンマンはまさに利他性を備えたヒーローであり、自身をやっつけることを生き甲斐とするばいきんまんとも共生を志向する。最近「〇〇ファースト」に共感する人たちが増え、異質な存在を排除する動きも散見される。しかし、皆がほんの少しでも利他の精神を意識すれば、もっと生きやすい世の中になるのではないかと、思う次第だ。

（（株）農林中金総合研究所 理事研究員 南 武志・みなみ たけし）